Otemae University

紅楼夢管見(一)
A View on "Hung Lou Meng" (I)

籔　本　　肇
Hajimu YABUMOTO

中国の古典小説中，最高の名作，「紅楼夢」が世に出て既に二百年になる。

戦後，中国各地での新しい資料の発見によって，紅楼夢研究は胡適の「紅楼夢考証」の段階から一歩前進してはいるが，この"一ケ真秀的作品"は，まだ「定本」の成立を見ないし，作品自体の成立事情や続作者の解明など，重要な研究課題を数多く残している。

だが，社会主義体制下の中国では，一般民衆のこの作品に対する関心は極めて高く，"紅楼夢の名前は小孩子でも知っている[①]"と言われ，政治思想面からの評価は絶賛に近いものがあって，今や"時代の脚光を浴びる紅楼夢[②]"の感がある。

蔣和森氏（人民共和国の現存作家）はその著「紅楼夢概説」(1982年・上海古籍出版社）に，„これこそ思想上でも芸術上でも，伝統の束縛を断ち切り，封建社会とその体制を厳しく批判し，併せてその内部的腐敗と矛盾を鋭く暴き上げた自然主義文学の一大世界的傑作である"と，惜しみなき称賛を与えている。

尤も，旧封建社会に於ても，清・乾隆初期，「紅楼夢」が世に出るや忽ち"好事者毎伝鈔一部，置廟市中，昂其値得数十金，可謂不脛而走者矣[③]"と言う程に江湖の好評を博して紅楼夢ブームが起きているし，更にその流行は，乾隆末期から嘉慶年間にかけて，北京江南はもとより全国に及んだと言うからその盛況は，ある意味では今日を凌駕するものがあった。

しかし，旧時の人気は主として大衆の嗜好に支えられたものであったが，今日のそれは，現政治思想からの再評価による関心の高さである。そこに本質的な差があると言える。

所で，「紅楼夢」が現中国でこのような高い評価を受けるに至ったには，ひとつの経過がある。

その発端は，一世を震撼せしめた彼の「紅楼夢論争」であった。

1956年6月，当時無名の学徒であった李希凡と藍翎が連名で「紅楼夢後四十回為什麼能存在下来」と題する論文を発表して，俞平伯の「紅楼夢研究」に見られる「プチブル的・観念的文学研究法」に社会主義理論からの疑問を投じた。

これがきっかけで，毛沢東主席の「闘争展開の指示」(10月）という一幕もあって，その年の冬から翌年秋にかけて，文化人層をゆるがす一大批判運動が巻き起った。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

始めは，旧観念論的研究姿勢を批判し，「文学遺産の再評価・古典研究の観点についての再検討」を提唱するものであったが，やがてそれが俞平伯に深く影響したとされる胡適批判へと発展するに及んで，学問上の論争が思想旋風的趣きを呈するに至った。

その後，「四人組」の時代に入ると，「半紅学家」を自称する江青（毛沢東夫人）は“紅楼夢第一回の「好了歌」は紅楼夢の主題歌”であると言い出すなど，並々ならぬ熱の入れようであったが，「紅楼夢の裏にある旧社会の消極的人生観（色と空の観念）を肯定して，胡適派と索隠説（訳者注・俞平伯の紅楼夢索隠をさす）の残滓を生きかえらせたり，作品の思想性に目を蔽い，社会的意義を持った愛情の葛藤を，単なる封建貴族階級内の父方親族と母方親族の争いとしか見なかったり，自分の都合に合せた勝手な解釈を演出して，それを自己の政治的野心の手段にしようとして，結局，多くの同志の批判を受けて[④]」追放されてしまった。

そして今日では，「社会的背景との関連の中で主題を追求」しようとする研究姿勢と，「読者への影響面を重視」する立場から，紅楼夢を「封建社会に対する反抗と憤り」の声とする見方が一般に承認されている。

もとより，「紅楼夢」に対するこのような見方も亦，紅楼夢についての「ひとつの見解」であるには違いないが，解放下の現中国での紅楼夢賞讃には，恰も原作者曹雪芹が，高い社会意識の持主であったかの感を与えかねまじい筆致のものが時に目立つことがある。

果して「紅楼夢」の作者に，どのような社会意識があり，又，その底にどのような彼自身の人生観と女性観があったのか。——これは今後，この作品の持つ特殊な性格を解明して行く上での重要な手がかりである。それは，この作品のテーマと深くかかわり合っているからである。

思うに，この作品のテーマは決して単一ではない。大河ドラマ的結構の中に，幾つかのテーマが撚り合わされた重層構造になっている。

それは，人間がその生存界に織りなす現実の諸相であって，人間と人間社会が，本来的に具有する諸面がありのままに描き出されているに過ぎないのであるが，それが生々しいだけに，その底に流れる作者の人生観・女性観が問われねばならない。

作者の人生観・女性観は，「制作意図」の中心課題であるからその項に詳述するとして，ここには筆者の私見の概要だけを提示しておく。

先ず，「紅楼夢」の描く所は徹頭徹尾「女の世界」である。作者はその巻頭に，この書の主旨を“但書中所記何事何人？自己又云，今風塵碌々，一事無成，忽念及当日所有之女子，一々細考較去覚其行止見識皆出我之上，我堂々鬚眉，誠不若彼裙釵，……然閨閣中歴々有人，萬不可因我之不肖自護己短，一並使其泯滅也。……亦可使閨閣昭伝，……”と述べている。簡単に言えば「かつて彼の周囲にいた女性たちは皆すばらしい人たちであった。私は彼女たちを記録にとどめなければならない」と言うことである。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

作者はその言葉通り，かの裙釵たちを一人一人見事な肖像画に描き上げている。「女性を描くこと」が目的であったのは疑う余地がない。

だが作者は，これだけの大部の作品の中に，単に女性を描いただけなのか。

作者の眼に映る数多の女性像とその内面の情状が，リアルに描かれれば描かれるほど，我々はそこに作者の「見る目」（主観）が鋭く投影されているのを見ることになる。

作中の女性像も，その女性たちの「生きざま」も，余りにもリアルである。おそらく作者の身辺にモデルとなった「女の世界」があったに違いない。

夫々に傑出した多彩な女性たちに取巻かれ，その葛藤の相を見ながら，作者は長嘆息せずにはおれなかったのではなかろうか。――「女とは，一体何なのだろう！」と。

作者は女性を描きながらその答を探り続けた。或は，それを探らんが為に描き続けたのでもあった。

そして，それは同時に，描くことによって読者にそれを問いかけることでもあった。[5]

だが，紅楼夢の前80回の限りでは，それは十分に果されていない。ただ第5回の「紅楼夢十二支曲」の情状等から推して，作者はこれら女性の終局を「空」に帰せしめるつもりであったらしい。

おそらくそれが，彼の「悟り」であったろう。そしてその「達観」に立って，ありし日の女性たちの「在りの姿」をここに留めておくことが，彼女たちへの，せめてもの「手向け」ではなかったろうか。

曹家往昔の栄華も，その中に生きた閨閣歴々の裙釵たちも，すべてが「幻」であった。所詮，紅楼一場の夢に過ぎなかったのである。

本稿の目的とする所は，紅楼夢原作者の「制作意図」を探るにある。上記，作者の人生観・女性観については，その中で詳しく触れることになるが，それへの過程として，先ず「版本について（版本と，それにまつわる幾つかの問題）の検討」，次いで「作者の人物像」を探り，「作品の成立と流行」から「作品の分析」に入り，「制作の意図」についての考察に進むことにする。

1　版本について

「紅楼夢」の版本について考える上で，最大の課題は，「定本」の「底本」をどうするかの問題である。

それは「紅楼夢」にはまだ定本が成立していないのみならず，厳密な意味では，その底本さえ定まっていない実情に由来する。

本稿では版本の系列を歴史的な経過をたどりながら，焦点をこの「最大課題」に据えて，周辺の諸問題にも触れて行きたいと思う。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

版本についての考証は，戦前に胡適と俞平伯にその労作があるだけで，戦後も最近まで殆ど見るべきものが無かった。が，近時，脂硯斎評のある古抄本の発見が相次ぎ，その研究から従来の定説に修正が加えられるなど，眠りから覚めた書誌学に新たな期待が寄せられている。

古抄本で現在知られている版本は，

乾隆甲戌(乾隆19年，1754年)脂硯斎重評本（16巻残本）

乾隆己卯(乾隆24年，1759年)脂硯斎重評石頭記四閲評過本（38巻残本）

乾隆庚辰(乾隆25年，1760年)脂硯斎重評石頭記四閲評過本（78回存）

乾隆甲辰(乾隆49年，1784年)夢覚主人序本（80回存）

乾隆己酉(乾隆54年，1789年)舒元煒序本（40回？）

その他年代不明の残巻

というのが諸家の略共通する所であるが，蔣和森氏の「紅楼夢概説」に

清怡親王府抄本脂硯斎重評石頭記（41回と半回の２種を存す。通称己卯本）

との記載がある。

上記の「己卯本（38巻残本）」とは，その巻数から見て別個の己卯本なのか疑問の存する所である。

古抄本として現存するものではないが，

戚蓼生序紅楼夢(民国初年，1912年)有正書局石印80回本（大字本と小字本があり，小字本は後出のもの）

と，今ひとつ，

国初鈔本原本紅楼夢（詳細不明）

の両者は，一応古抄本の系列内のものと見ることが出来る。

但し，前者（戚本）は後者（国初鈔本）の復刻と称しているが，復刻直後に底本が焼失したとのことで検証不能である。

「国初」「原本」が宣伝用のうたい文句であることは明瞭（異本の存在を意識した国初原本などあろう筈がないし，紅楼夢の「成立事情」ではその確めようがない）であるから疑えば，底本の存在が，そして戚本の学術上の価値までが問題となるが，ある程度の検討を経て，左程に疑わしいものではないとして古抄本の系列に加えられている。

これについて胡適は，「乾隆時無数にあった写本の中のひとつが，幸いに散佚を免れて保存されたものであろう」と軽く扱っている。

一方，俞平伯は「これも（貴重な）脂評本のひとつで，年代は庚辰本と甲辰本の間に入れるべきものである」と，熱のこもった受留め方をしている。

筆者は，甲辰本とほぼ同時期のものと見ているが，それについては「題名」の項に改めて述べる。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

因みに，我国の国訳漢文大成・紅楼夢80回(大正9年，1920年)はこれを底本とした飜訳である。

これらの古抄本を通覧して，ほぼ共通していることは，

1. すべて80回本であること。
2. 脂硯斎評がついていること。
3. 甲辰本を例外として，他はすべて題名が石頭記であること。(戚本は除外)

の3項であるが，

2.の脂硯斎評を持つ版本については，周汝昌や呉恩裕の近年の研究によって，それが原作者の生前或は歿後間もない頃に世に出たものであって，原稿本の面影を比較的忠実に伝えているとの見方が一般に承認されている。

刻本の時代に入ると，版本はすべて「紅楼夢120回本」になる。

最初の排本は，程偉元・高鶚の両名の手になる「新鐫全部繡像紅楼夢120回」であるが，これには初版と改版の2種類がある。即ち，

第1次木活字本紅楼夢・乾隆辛亥(乾隆56年，1791年)冬至後五日・萃文書屋刊

の初版に続いて，その3ヵ月後に，

第2次木活字本紅楼夢・乾隆壬子(乾隆57年，1792年)春朝後一日・萃文書屋刊

を改訂版として刊行している。

この2種の版本について，胡適はその「紅楼夢考証」(民国11年，1922年）に於て，前者（辛亥本）を「程甲本」，後者（壬子本）を「程乙本」と名付け，120回の前80回の作者は曹雪芹であり，後40回は高鶚の続作であると断定しながらも，「壬子本」はその「引言」に識している通り“初印時不及細校，間有紕繆。今復聚集各原本，詳加校閲，改訂無訛。”であるから“勝於程甲本”であるとし，「これは高鶚程偉元合刻の定本と言ってもよい」とまで推賞している。

胡適が「程乙本」を定本とする理由は十分な説明はされていないが，「程甲本」より勝っているとする根拠に，「程甲本」のストーリーの中の矛盾を「程乙本」が改訂した実績を幾つか示している。

例えば，「程甲本」では，第2回に元春の生れた翌年に宝玉が“不想次年又生了一位公子”として（所謂年子の弟として）生れたことになっているのに，第18回では，三四歳になった宝玉に“雖為姉弟，有如母子”な元春が読書の手ほどきをしている，と言うような混乱がある。――「何とこれがひとつ年上の姉さんか」と胡適は苦笑しているが――それを「程乙本」は，第2回の宝玉の誕生を“不想隔了十数年　又生了一位公子”と改めることによってこの矛盾を解消している，が如きである。

「程乙本」のこの種の改訂によって，ストーリーの首尾が一貫し，内容の整合がはかられて，物語としての完成度が高まったのは事実である，が然し，それは他面では，原作の

NII-Electronic Library Service

Otemae University

ありのままの姿から遠ざかる結果となっている。

近年「脂評本」の研究が進むにつれて，本文中のこの種の矛盾錯雑は，原作者の定稿中に既に存在するものであって，敢えてそれに改訂の手を加えて原作の趣を薄めることが正しいのか，との疑問が提起されて，胡適の“成績”は修正を迫られている。

のみならず，「程乙本」では，後40回を補った続作者（高鶚と目されている人物）は文章の調子を統一する必要からか，前80回の文章にも手を加えている。特に辛亥版の文語的語詞を白話体（口語表現）に改めた為に，原作の含蓄と曲折に富んだ文章の魅力が薄れてしまった，との駁胡適論[6]もあって「続作見直し」の機運が濃くなっている。

さて，「改訂」の当否は兎も角として，「萃文書屋刊120回本」の出現は，紅楼夢流行の上に重大な意味を持つものであったことは否定出来ない。

先ず，それ迄の伝写本の混乱（伝写に付きものの不注意による誤説・評注の本文混入・恣意的な改删等）に終止符を打ったこと。次に，未完であったこの物語を完結させることによって，それ迄巷にあふれていた世俗的「その後物語り」的続作補作の類を一掃したこと。そして紅楼夢は「程・高」の手になる「120回完結本」一本に絞られ，排本の普及とも相俟って全国的大流行を見るに至ったことである。

高鶚なる人物については，続作者を探る項に後述するから暫らく措くとして，共同出版人たる程偉元は，当時，北京と江南に店を持つ書肆「萃文書屋」の経営者と目されてはいるが詳細は不明である。ただ，3ヵ月で改訂版を出したことについては，松枝茂夫氏は「江南地方の読者層を当てこんでの販売策ではなかったか」との推測を下しておられるが[7]同感である。

この種の「改訂」は「紅楼夢」の前に大流行を見た「水滸伝」に同様の（山東方言を江南語に換えて大当りをとった）前例があるから販売策としては異例のことではなかったのであろう。

だが，萃文書屋の場合，売れたのは皮肉にも初版の方であったと言う[8]。

「程・高」の刻本以外では，

道光壬辰(道光12年，1832年)王希廉評刻本紅楼夢（120回）

などもあるが，名を揚げておくに止める。

民国に入ってからの活版本は数多いが，特に言及を要するのは，

亜東旧本紅楼夢(民国10年，1921年)上海亜東図書館版120回

亜東新本紅楼夢(民国16年，1927年)上海亜東図書館版120回

である。

前者は「道光本」を底本とし，後者は「程乙本」を底本としていて，共にその巻首に胡適の「紅楼夢考証（改定稿）」を載せている。

旧本の6年後に出された新本は，謂わば「胡適推薦折紙付」の「紅楼夢」であった。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

刊行が旧小説の普及に権威と実績のある「亜東」であり，底本が高名の学者胡適が絶賛している「程乙本」であるから，この新本紅楼夢は読書人層に強くアピールした。

爾来「亜東新本」が最も信頼出来る版本であり，「程乙本」が準拠すべき底本であるということになった。

依って，それ以後の版本は，殆どが「程乙本」を底本とするものになっている。解放後の出版である「作家出版社本」(1953年，北京)「人民文学出版社本（1957年，北京)」共に然りである。

因みに，「平凡社刊(S.32～S.35)中国古典文学全集・紅楼夢・伊藤漱平訳」は「亜東旧本」を，「岩波文庫本（第1次）紅楼夢(S.15～S.26)松枝茂夫訳」は「亜東新本」を，「集英社刊(S.54～S.55)世界文学全集・紅楼夢・飯塚朗訳」は「人民文学出版本」を夫々底本としている。

版本の上にも胡適の影響は大きかったが，その「紅楼夢考証」は研究業績としては劃期的なものであった。その学術上の価値の高さと成果の偉大さは認められねばならない。

近時の研究によって若干の修正を要する所はあるが，その大綱に於ては，今尚，学界の定説たるを佚してはいない。前記「作家出版社本」が胡適の名を伏せて，その「考証」をそのまま使用しているのは如実にそれを物語るものである。

胡適のあとを受けて，胡適を継承しつつも新しい観点に立って対立見解を打出したのが俞平伯である。

この両者の見解の差が最も鋭く対立するのは「後40回の扱い方」についてである。

胡適は，後40回を補作した高鶚が，この物語を悲劇に終らせた文学的見識を評価して，高鶚の補作を「紅楼夢」の終結部と認め，「紅楼夢」は2人の作者（曹雪芹と高鶚）によって完結した120回章の一作品であるとする。

俞平伯は，可能な限り原作者の手になる原本に近づくべきであって，高鶚の続作である後40回はあくまでも一続作にすぎない。未完80回を以て「紅楼夢」とすべきである。従って「脂硯斎評本」に帰るのが最も妥当な途であるとする。

俞平伯のこの脂評本重視の立場から出版された，現在最も新しい版本が，

俞平伯校定紅楼夢80回本（1958年，人民文学出版社刊）

である。

「戚本」を底本に，「脂評本」「庚辰本」を主たる校本に，その他の抄本を参考にして，「程甲本」を底本とした「後40回」を付録につけている。

「平凡社刊(S.42～S.45)中国古典文学大系・紅楼夢・伊藤漱平訳」「岩波文庫本（第2次）紅楼夢(S.47～S.60)松枝茂夫訳」は共にこの「俞平伯校定本」を底本としている。

版本ではないが，研究資料として，脂硯斎各種本の評註部分だけを集めたものに，

脂硯斎紅楼夢輯評（俞平伯輯・上海文芸聯合社・中国古典文学研究叢刊・1952年）

NII-Electronic Library Service

Otemae University

がある。が，その「解説」に，「乾隆甲戌本」は残本数回しかないが現存最古の抄本で，その第1回冒頭に「凡例」があり，他本とはかなり違っているようだと紹介している。

なお，前記の「俞平伯校定本」では第1回部分にその「凡例」も含めて「甲戌本」を採用している。

最後に，近年発見を報ぜられたものに，

科学院文学研究所蔵本（120回）

アジア民族研究所レニングラード支部本（78回）

蒙古王府本（120回）

靖応鷗蔵本（78回）

があることを附しておく。

版本の概要は以上のような所であるが，最大の課題は「定本の底本」設定の問題である。

底本採択の基準を何に置くかによって，この問題は基本的に対立する二つの立場(見解)に分れる。

ひとつは，120回本は後40回が高鶚の補作で前80回と作者を異にはするけれど，幸いに高鶚の補作は作品の芸術的「質」をおとすことなくこの物語を完結させている。従って120回をひとつのまとまった物語と見て何の支障もない。謂わば2人の作者によるひとつの作品である。紅楼夢をひとつの物語として扱うのであれば，ストーリーの完結している120回本を採らざるを得ない，とする立場。即ち，その基準を「物語としての完結度の高さ」に求めようとするものである。言うまでもなく上述の胡適の立場である。

今ひとつは，俞平伯の立場で，文学作品としての紅楼夢の価値は120回を必要としない。未完のままの紅楼夢が本物の紅楼夢なのである。どのようにうまくストーリーをまとめたとしても，所詮「続作は続作」でしかない。他の多くの補作続作と本質的に何の差があろう。「紅楼夢」の作者は曹雪芹1人であって，紅楼夢研究は出来得る限り曹雪芹の原作に近いものをもって，それを研究の基礎とすべきである。それには現在のところ脂評本80回がある。「研究対象としての純度の高さ」に基準を求めるならこれを択ばざるを得ない，とするものである。

胡適の立場は「現実容認」であり，俞平伯の立場は「純粋追求」と言える。そこで，前者を「現実派」，後者を「純粋派」と名付けておくことにする。

言うまでもなく，この対立の起源は胡適の「紅楼夢考証」にある。

胡適はその「考証」の中で，「高鶚がこの物語を悲劇に終らせた」ことを高く評価して“不能不佩服高鶚的補本子。我們不但佩服，還応該感謝他，因為他這部悲劇的補本”と絶賛しているのに対し，俞平伯はその「索隠」に「程高両人は後40回を付け足しただけでなく，前80回にも手を入れて原作を傷つけた」と厳しい批判を下している。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

現実派胡適の推す底本は「程乙本」であり，純粋派俞平伯を採る底本は「脂評本」である。

これが両派対立の概要であるが，胡適の程乙本推賞の背後には彼の白話文学推進の立場があったことは十分考え得る。が，それでも尚，両者の見解（或は感覚）の違いには，学者であって外交官（駐米大使）であり得た胡適と，学者であり詩人であった俞平伯の人柄の差がにじみ出ているのではなかろうか。

胡適の「紅楼夢考証」が今もってひとつの権威であり，大きな影響力を有するものであることは既に述べたが，それ故に，今日まで底本の主流は「程乙本」が占めて来た。

だが，「俞平伯校定本」が出るに及んで形勢は逆転の様相を見せ始めている。それは学術研究の上で「脂評本」が遽かにクローズアップされて来たからである。

今後，底本の主流が「脂評本」に移ることは先ず間違いないであろう。

しかし，底本の主流が脂評本に移っても，120回本の意味がなくなった訳ではない。120回本には「物語」としての独自の意義がある。

例えば飜訳である。飜訳は一種の創作であるからその原典に原作者以外の何者の手が加っているか否かは左程問題ではない。それよりはその原典が，訳者にどれだけ豊かなイメージを与えることが出来るかが問題である。

飜訳の際の底本は勿論120回本でなくてはならない。そして，120回ものの中のどれが最もそれに相応しいかは文学鑑賞上の問題である。

筆者の私見であるが，学術研究の立場から脂評本を底本とした「定本80回紅楼夢」が遠からず誕生するであろうが，読みものとしての立場から，80回本とは別に「定本120回紅楼夢」があってよいのではなかろうか。

以上の所，後40回の作者は高鶚であるとして話を進めて来た。底本設定についての現実派純粋派両派の具体的対立点も，高鶚を作者と認めるか否かの一点にあった。だがそれは「高鶚なる人物・即・続作者」の実在を前提としての話であった。

所が，高鶚自身はどこにも自ら続作者であるとは言っていない。（残稿を補綴しただけだと言っている。）

程甲乙両本とも程偉元の序があって，その中に「目録では120巻あるのに実際には80巻しかないので手を尽して捜した。蔵書家から反故の山まで。それでやっと20巻余りになった。偶々紙屑買いの荷の中から10余巻を高く買取って大悦びで繙閲して……細加釐剔，截長補短，鈔成全部……石頭記全書至是始告成矣」と記している。

これを胡適が「そんな旨い話があるものか」と一笑に付して「高鶚の続作」を強く打出して以来，高鶚は続作者としての栄誉と加筆者としての批判を受ける身の上となった。

以来，高鶚の“身世”についての探求が続いて来たのだが，最近その中から「高鶚を後

NII-Electronic Library Service

Otemae University

40回の作者とすることには疑問がある」との声が出始めた。（「続作者」の項で詳述するが，伊藤・松村両氏ともそれを指摘しておられる。）

高鶚が続作者でないとすると「続作者は誰か」という新しい問題が起きて来るが，実はその前に，後40回は何者かの補作或は続作ではなくて，原作者の残稿の補綴されたものではないか，との疑いがある。前述の程偉元序の残稿探しの話を胡適は一笑に付したけれど，“乃同友人細加釐剔，截長補短”をある程度事実と見る「残稿補綴」を筆者は最も公算の高い推定と考えている。

ひと口に残稿と言っても，その程度によって補綴の幅も違っては来るが――それがどの程度のものなのか（補作乃至続作に近いものなのか）は今後の研究に俟たねばならないとして――結果的に後40回も原作者の手になるものと認定されることになると，底本設定の課題を現実派純粋派の対立の図式で考えることは出来なくなるであろう。

或は寧ろそれより先に，補綴の程度の「認定をめぐる論争」の「底なし沼」に底本設定が陥ち込んで行く危惧も否定出来ないのではなかろうか。

ともあれ，底本についての筆者の考えは前述の通り，120回読みもの用，80回学術用の2本建て案であるが，研究の用に供する為の底本としては現在の所「俞平伯校定本」の右に出るものはない。従って本稿もこれを底本としている。

版本研究の中で，その作品の題名の由来や変遷などの問題は一般的には特に取上げる程のことではないから大抵の場合無視されているに近い。

では，「紅楼夢」の場合はどうなのか。試みに探ってみることにする。

「紅楼夢」の題名は現在では「紅楼夢」に決っているが，「紅楼夢」となったのは刻本以来のことで古抄本は「石頭記」であった。

いつ，誰が，何故，そう変えたのか。それについての具体的論拠となる資料を入手しかねている現状では，妄想性推論の域を出ないのだが，「揺れ動く題名」の背後に「興味ある事情」が窺えるのではないかと「頼みなき望みの末を」古抄本にかけて，その題名に係る事項を整理してみたのが下記の小論である。

「俞平伯校定本」はその巻首に，「甲戌本」の第1回冒頭にある「凡例」をそのまま引いている。

「凡例」はその第1則を「紅楼夢旨義」と題して「この書には題名が多い。紅楼夢というのはその全部を総べた名である」と言い，続いてその多くの（と言っても4つだが）題名「石頭記・紅楼夢・風月宝鑑・金陵十二釵」についても夫々の“点睛”を説いている。が，それは恰も同一作品が幾つかの違った題名で出廻っていることについての釈明である。

次の第2則では「この書は専ら閨中のことを叙述したもので家庭外に渉ることはなるべく簡単に片付けている」と言い，第3則では「この書は決して朝廷のことには渉らなかっ

NII-Electronic Library Service

Otemae University

た。それに触れざるを得ない時は一筆で付言するにとどめた。女子供のことを書く筆墨で朝廷を冒瀆することは畏れ多くて我らの敢てせぬ所である」と，頻りに朝廷に気を使って本書に政治的意図のないことを強調している。

更に本文に入って，その第1回の「縁起」の部分に先ず「空々道人がこの書を細閲し直してみるに勧善懲悪のことばもあるし，世を誹るものでもなく，人倫に則っていることは他書の比ではない」と，風俗面でも決して問題になるような悪書ではないことを強調しておいて，続いて「そこで空々道人は……この石頭記を情僧録と改め，次に呉玉峯が紅楼夢と命名し，東魯の孔梅渓が風月宝鑑と名付け，曹雪芹が悼紅軒中で手入れをして金陵十二釵と命名し，絶句一首を添えて……」とあり，その絶句のあとに「脂硯斎が甲戌の年に重ねて評を加えた時，石頭記の題名を復活させた。」と題名の変遷を説明している。

思うにこの作品は，当初，石頭記・紅楼夢・風月宝鑑・金陵十二釵の書名で発表されたが，同一書に幾つもの題名のあるのは不合理不自然であるとの批判（或は反省）があって題名を統一することになったが，題名統一に当って評注者脂硯斎老人[9]は文字獄を慮って「石頭記」を推した。それは「石頭記」の名称は前年「誨盗の書」として禁書に指定された「水滸伝」の文字面での対立語に当るから「アンチ水滸」のイメージを狙ったものであった。

これに対し，まだ四十歳前後だった作者曹雪芹は「紅楼夢」を主張した。それは確かにその内容に相応しい，そして芸術的香気の高い題名であった。

結局作者の意向が尊重されて，題名は「紅楼夢」と決ったが，この派手な名称はその派手さだけで官憲の眼をひく惧れがあった。それ故脂硯斎老は，「凡例」に「縁起」に，このような「権力への配慮」をしなければならなかったのである。――「懸念」のない所に脂硯斎がこのような「配慮」をする必要はなかろうから，おそらく当時（それはこの作品が発表されて数年後であろう）既に脂硯斎の懸念を裏付けるような動きがあったのだろう。そしてそれが，当初この作品に幾つもの題名を使わせる理由だったのかも知れない。いずれにせよ「紅楼夢」はその発表の最初から「その筋」に「睨まれ」ていたことは確かである。

題名を「紅楼夢」に統一してから甲戌の年まで何年間であったか明らかではないが，この作品の人気は高まるばかりで，間もなく「誨淫の書」として禁書に指定されること必定となったので，甲戌の年，猶予はならじと脂硯斎は「石頭記」へ題名変更に踏切ったのである。

以来この作品は「石頭記」の名で流行することになるが，脂硯斎のカムフラージュ策が効を奏したのか（この程度の工作で官憲の眼を晦ませるとは考えられないが）或は朝野あげての紅楼夢熱が禁書の指定を押切って文字獄に至らなかったのか。――程偉元序に言う“好事者毎伝鈔一部，置廟市中，昂其値得数十金，可謂脛而走者矣。の数十金は実に狂気

NII-Electronic Library Service

Otemae University

的金額であるが発禁書の闇値だったのだろう。当時の紅楼夢熱の盛大さについては鄒弢の「三借廬筆談」に詳しい。(成立と流行の項に詳述)

虎口を脱した「石頭記」はその後30年間，利に聡い商人たちの便乗もあって堂々と天下に流行した。幾度か禁書リストに載せられたと言うが問題になっていない。禁書は建前でしかなかったのであろう。脂硯斎苦心の「凡例」もいつしか削られてしまった。

乾隆末期になって「甲辰本」が正式に「紅楼夢」と銘打って出たのは世間では「石頭記」とは言わないで「紅楼夢」と呼んでいたからであろう。「戚本」も同じ頃，同じことをやっているのはその頃すでに官憲を意識しないで「紅楼夢」を称することの出来る機運が醸成されていたからであろう。

しかし，題名は正面切って「紅楼夢」とは変えたが，「縁起」の中の空々道人の「本書推薦の辞」によるカムフラージュは残している。官憲の面目をまるつぶしにすることは憚ったのであろう。——同じ「縁起」の，その次に続く書名の変遷の中から「呉玉峯が紅楼夢と命名し」と「脂硯斎が甲戌の年に……石頭記にもどした」の2条が削られていて，これによって題名の変遷が極めてすっきり「スマート」になっているのだが，これに手を付けていながら「推薦の辞」を残したのは，やはり官憲への配慮であったと見ることが出来る。

乾隆末も押迫って，刻本の時代に入ると，田舎でも「金玉縁」などと言うような「禁書のがれ」の題名は使われなくなって，天下晴れて一斉に「紅楼夢」を掲げている。のみならず七八年前には温存された「推薦の辞」も外されてカムフラージュ皆無の姿になっている。そして遂に中国文学史上空前の大紅楼夢ブームが巻き起り，各地に「紅迷」の出現を見るに至るのである。

文化史の上では，「文字獄」はその初期(漢に起り明を経て清初までの間)は反権力文書に対する制裁であったのが，清朝に入って反権力のみならず反社会道徳にまで拡がった。とは言っても，乾隆初中期までは艶書の類には比較的寛容であった。それが厳しくなったのは乾隆末期からである，とされていた(支那文化史講話)が，「紅楼夢」の上述の実情を見ると，文字獄に対して最も強い懸念を示しているのは乾隆初期の「甲戌本」であり，乾隆末期にはその気配さえなくなっているのは聊か奇異の感を免れない。

紅楼夢人気がいかに強かったとはいえ，強大な清朝最盛期の権力がそれに屈するとは思えないからである。

「紅楼夢」に限って何か特別の事情があるのか，文字獄なるものの実態と史伝の間にギャップがあるのか。それともやはり，清乾の権を以てしても紅楼夢を禁圧し得なかったのであろうか。益々脹らむ疑問を以てこの稿を畢ることにする。

NII-Electronic Library Service

Otemae University

〔注〕

① 前駐日中国領事林則生氏談
② 同　上
③ 萃文書屋本紅楼夢程偉元序
④ 蔣和森・紅楼夢概説
⑤ 紅楼夢以前の中国の小説はすべて神の立場（全知全能）の作者から読者への一方通行であった。紅楼夢に至って始めて作者から読者への語りかけの姿勢が見られるようになった。
⑥ 武漢大学孫独秀教授談
⑦ 紅楼夢解説（第2次岩波文庫本）
⑧ 金子二郎・紅楼夢考
⑨ 「成立の事情」の項で詳述

上記外の参考文献

魯迅・中国小説史略	阿英・晩清小説史
逍遥子・後紅楼夢序	野口宗親・紅楼夢稿後40回について
壬子本紅楼夢	中国古典文学大系・紅楼夢
戚本紅楼夢	俞平伯校定本紅楼夢

NII-Electronic Library Service